
淡く散る

三船

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淡く散る

【Zマーク】

Z0551B

【作者名】

三船

【あらすじ】

電車待ちで、すれ違う同級生。空を切る視線の切なさ。

瞬間は痛く、喉を刺激して痛みは胸へ返る。あどけなく笑ったあの時の笑顔は何だったのかと自身に問掛けてみる。

駅の前で次の電車を待ち佇むんではいるが自分の進行方向とは逆の方向から来た電車が止まつた。風は降りた。彼女だつた。

そして自身は不意に手を振りひつとする。

答えは返らない。不意に視線が空を切り、風が通り過ぎただけ。

懐かしいものが急に溶け出した。

奥底で嘆く様に波を打つ正体に気付いてしまつた。ほんの少し、嘘の笑い方でいいから『久しぶりね』と笑つてほしかつた。半年で絆というものはこんなにも脆くなるのだろうか。なんだ、こんなのがりふれた事じやあないかと納得しようとする自分が居る。駅の真下にある売店の屋根の錆びた色が、自身の心をぎゅっと締付ける。

高校で行く道を違えただけで遠くなつてしまつた同士の背中がなんだか切なく思えてしまった。蘇る情景。あの日の君。

妙なポーズのデッサン。変に追い求めた真紅の絵の具。誰かさんの髪型に似てるね、と呟いた一瞬。すべてを。

否定されたした気がした。

彼女は彼女なりに新しい立位置を壊せまいと守つたのかもしれない。

彼女にとって自身は過去にすぎず虚しさだけが心の奥底を駆け巡る。

愛しい彼女は、ただ目の前を通り過ぎた。

心さえ通り過ぎたのだと。

悲しくも、やう思えた。

何かに押し潰されてしまいそうな自身に電車のライトが近付いてくる。温かい様だけれど無機質な淡い色を、なんだかひどく嫌に思つた。

(後書き)

「」まで読んで頂きありがとうございました。拙いなりに全身全靈にて書かせて頂きました。感想などありましたら宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0551b/>

淡く散る

2010年10月15日09時18分発行